

# 「道草」論 —語り手の造形をめぐる—

山下 航正

## はじめに

現在、夏目漱石の「道草」(大正四年六月〜九月『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』)研究において、語りの問題は不可避のものとしていられる感がある。それは、このテクストにおける語りを考察することが、主人公健三や妻の御住、彼らの親族に対しての語り手の視線の意味を問う営みであり、作家論から作品論への過程で試みられた(脱作家)、さらには、「道草」発表当時から指摘されてきた「道草」の(自伝的)性格、自然主義との関わりを検証することにもリンクするためである。しかし、多くの論考が積み重ねられる中で、語り手の性格、換言すれば語り手の意識という点に関しては、まだ検討の余地があるように思える。

本稿では、「道草」における語りを分析し、語り手の意識、語り手の性格を明らかにしていく。そして、そのような語り手の造形の必然を、作家の試みとして把握、認識することを目的とする。

## 一 語りにおける(批評)

「道草」において注目されるのは、語り手が登場人物を(批評)する存在であるということである。ただし、ここでの(批評)とは、語り手が登場人物に対して批判的または擁護的な判断を直接下すということではなく、物語に接する読者に、人物に対しての批判的または擁護的な判断が生じやすい語りを行っているという意味である。一般に三人称小説の場合、語り手はどの人物の側にも立たない、もしくはどの人物の側にも立つ、公平な存在であることが基本とされる。人物の言動を物語内での事実として語るには、そのような語りは不要であるからである。そのため、このような語り手はテクストの特徴の一つとして挙げられよう。

まず、主人公である健三について見ていく。健三に関して、語り手は「感傷的な気分支配され易い癖に、彼は決してフェモンストライチヤ外表的センメンタルにならない男であつた」(五十)、「世事に疎い彼は、細君の父が何処へ頼んでも、もう判を押して呉れるものがないので、しまいに仕方なしに彼の所へ持つてきたのだといふ明白な事情さへ推察し得なかつた。」(七十四)と批判的であり、彼の「時間に対する態度」(三三)についても、「守銭奴」(同)、「愚直」「神経的」(二十四)と、同様に批判的である。その他、「斯んな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの

位な事実が潜んでゐるだらうかと反省して見るよりも、すぐ頭の方で彼女を抑えつけたがる男であつた」(十)、「彼は黙つて立つてゐた。御住という名前さへ呼ばなかつた。」(三十)、「彼の顔には何の表情もなかつた。自分の二番目の娘が赤痢に罹つて、もう少しで命を奪はれる所だつた時の心配と苦痛さへ聯想し得なかつた。」(六十八)、「『あゝ云ふものが続々生れて来て、必竟何うするんだらう』／＼彼は親らしくもない感想を起した。」(八十一)というように、テクスト全体にもそういう態度は散見できる。

しかし、批判的な語りだけではなく、健三についての語りには擁護的なものも存する。例えば、「(風邪が回復した後)に御住の顔を見て——引用者注)さうして急に其細君の世話になつたのだといふ事を思ひ出した。然し彼は何にも云はずに又顔を背けてしまつた。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。」(十)、「もしあの憐れな御婆さんが善人であつたなら、私は泣く事が出来たらう。泣けない迄も、相手の心をもつと満足させる事が出来たらう。零落した昔しの養ひ親を引き取つて死水を取つて遣る事も出来たらう』／＼黙つて斯う考へた健三の腹の中は誰も知る者がなかつた。」(六十三)などの言説には、石原千秋氏が指摘する彼の「非行為」の裏に、評価すべき思考や意識があつたことを感じさせる働きがあり、読者に与える印象を肯定的なものに導いてゐるといえよう。あわせて、「自分も兄弟だから他から見たらどこか似てゐるのかも知れない」(三十七)、「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剥けば己だつて大した変りはないんだ」(六十七)、「ことによると己の方が不人情に出来てゐるのかも知れない」(八十六)といった内言や、「彼は慚愧の眼をもつて当時の自分を

回顧した。」(三十六)、「さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強慾な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ気が強くした。」(四十八)という心境を示すことなどにより、健三に自省意識が芽生えつつあることを伝えようとしてゐる。ただし、彼の意識は最終的には「何不人情でも構ふものか」(八十七)という点に帰着し、健三の認識深化の道は閉ざされてゐる。語り手は、彼の性格や思考に対して批判的に、彼の内省に対しては擁護的に語つてゐる。

次に、御住についてである。彼女についても批判的な語りと擁護的な語りが見られるが、健三の場合とは様相が異なつてゐる。批判的な語りは、彼女が理知的ではないという点に多く用いられてゐる。「彼女は理智に富んだ性質ではなかつた。」(六十五)、「筋道の通つた頭を有つてゐない彼女」(七十一)、「彼女の胸には微かに斯ういふ感じが湧あつた。然し彼女は其微かな感じを言葉に纏めるほどの頭を有つてゐなかつた。」(八十五)、「斯んな事に掛けると存外無神経な細君は、強ひて姉を弁護しやうともしなかつた。」(同)、「何でも眼に見えるものを、しつかと手に掴まなくつては承知出来ない彼女は、此上夫と議論する事を好まなかつた。又しやうと思つても出来なかつた。」(九十八)と、それは繰り返して語られる。同時に彼女は、「彼はことさらな咳を二度も三度もして見せた。夫でも細君は依然として取り合はなかつた。」(九)、「然し事実の興味が主として働きかけてゐる細君の方では丸で文体などに頓着しなかつた。」(三十二)、「平気な細君は其続きを讀み出した。」(同)と、無神経な人物であることが強調されてゐる。その反面、彼女に対しての「細君は成人しない多くの子供を後へ遣し

て死に、行く、まだ四十に充たない夫人の心持を想像に描いた。間近に逼つたわが産の結果も新たに氣遣はれ始めた。重さうな腹を眼の前に見ながら、それ程心配もしてくれない男の氣分が、情なくもあり又羨ましくもあつた。」(六十一)、「『喧嘩をするのは語り両方が悪いからですね』／彼女は斯んな事も云つた。」(六十五)などの擁護的な語りもあるが、その数は健三へのそれに比して少ない。「彼の理解してゐる細君は斯んな氣の利いた事を滅多にする女ではなかつたのである。」(五十三)という箇所などは、批判的ではある。御住に対しての語りは、全体的に批判的であることが言えよう。

今見たような健三夫婦についての語りに比して、二人以外の人物、すなわち御夏や比田、長太郎、健三の実父や岳父、島田や御常については様相が異なり、批判的な語りのみが見られる。

まず御夏は、「非常に饒舌る事の好きな女であり」「さうして其喋舌り方に少しも品位といふものがな」(四)、「多弁」(六)な女として語られている。また、「落付のないかサツな態度」(四)のある「勝氣」(五、六十七)な性格の持ち主とされ、「細かい所に氣の付く」こと(六十九)も「一面に於て馬鹿正直」で「一面に於てまた変な廻り氣を出す癖を有つてゐた」(同)という批判的な語りが付されている。その夫の比田も、「女房の喘息などは何うなつても構はないといつた風」(二十六)で「女房の持病を苦しめない」男であり(六十六)、「手前勝手」(二十六、九十九)で「無責任」(三十七)な男と語られている。また御夏夫婦は、後半で高利貸しを始めるに際し、「自分達の境遇が變ると、昨日まで輕蔑してゐた人の真似をして恬として氣の付かない姉夫婦は、反省の足りない点に於て寧ろ子供染みてゐた。」(九十

九)と、健三の内言に沿う形でも批判される存在である。長太郎に關しても、「彼は斯うした不安を何度となく繰り返しながら、昔しから今迄同じ職務に従事して、動きもしなければ發展もしなかつた。」(三十四)、「其癖彼はこんな場合に決して自分で懸合事などに出掛ける人ではなかつた。」(三十七)と、その語りは批判的である。

また、健三の実父や岳父も、批判的な語りでもつて表されている。それぞれについての、「他の口車に乗せられ易い、又見え透いた御世辭を嬉しがり勝な健三の実父」(六十四)、「斯ういふ手腕で彼に返報する事を巨細に心得てゐた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口づから述べなかつたかの原因に就いては全く無反省であつた。」(七十七)といった箇所などからは、決して好印象をもつては語られていない二人の像が感じ取れる。

島田と御常もこれらの例外ではなく、「吝嗇」(四十、四十一)という象徴的な言説でもつて評される存在である。島田は「かねて横風だといふ評判のある男」(十六)、「たゞ金銭上の慾を満たさうとして、其慾に伴はない程度の幼稚な頭腦を精一杯に働かせてゐる老人」(四十八)、「づうくしい割に頭の発達してゐない」人物(九十)として、また御常は「非常に嘘を吐く事の巧い女」(四十二)、「彼女と接触した自分以外のもので、果してその性格を見抜るたものが何人あるだらうかと、一時疑つて見た位、彼女の口は旨かつた。」(六十四)とされ、「何んな場合でも、自分に利益があるとさへ見れば、すぐ涙を流す事の出来る重宝な女」(同)であるとも語られている。「夫婦は何か付けて彼等の恩恵を健三に意識させやうとした。」(四十一)と

いう箇所にも表れているように、彼らの計算高さが批判的になつて

いるのである。

以上のように、語り手は主要な登場人物に対して否定的な語りを繰返している。そして、健三と御住に対してだけ擁護的な語りをやっているが、御住に対してはその数も少なく、健三ほどの擁護は行われていない。語り手の〈批評〉は、主人公である健三を引き立たせるために行われているところが多いということができよう。

## 二 語りの仕組み

先の分析で、語り手の〈批評〉は健三を中心とした、決して公平なものではないということを確認した。このことと関連するのが、この〈批評〉を分析した際に指摘できる、巧妙な語りの仕組みである。それは、(a) 批判的な語り+批判的な語り、(b) 擁護的な語り+批判的な語り、もしくはその逆という組み合わせであり、その語りの対象が(1) 両方とも同一人物に向けられたものか、(2) 健三と彼以外の人物とに向けられたものかによって意味が異なってくる。(1) においては、対象となる人物への(a) 批判意識の増加か、(b) 最終的な批判意識もしくは擁護意識の提示がなされる。(2) においては、人物が比較されるように語られているということであり、(a) の場合には、両者が批判されるだけでなく、最初に批判される人物から次に批判される人物への批判の対象のすり替えが起きており、また(b) の場合には、批判される人物の存在により擁護される人物の擁護の度合いの増加が生じることとなる。以下具体的に追ってみよう。

まず、(1) の(a) は、次のようである。

「長さん、先刻から待つてるんだ」

性急な比田はすぐ座敷から声を掛けた。(i) 女房の喘息などは何うなつても構はないといった風の其調子が、如何にも此男の特性をよく現はしてゐた。(ii) 「本当に手前勝手な人だ」とみんなから云はれる丈あつて、彼は此場合にも、自分の都合により外に何にも考へてゐないやうに見えた。(二十六)

文(i)で「此男の特性」として語られた病床にある妻への無配慮が、文(ii)において「自分の都合より外に何にも考へてゐないやうに見えた」というように再度提示され、比田への批判意識が増幅している。このような語りは、連続した場合だけではなく間隔を置いた複数の語りとしても見られ、健三や御住、御夏らもその対象となっている。

次に(1)の(b)を見ていく。

「おい、己だよ。分るかい」

(i) 斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陳腐で簡略でしかもそんないな此言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。それから跪まづいて天に禱る時の誠と願もあつた。

「何うぞ口を利用して呉れ。後生だから己の顔を見て呉れ」

彼は心のうちで斯う云つて細君に頼むのである。(ii) 然し其痛切な頼みを決して口へ出して云はうとはしなかつた。感傷的

な気分支配され易い癖に、彼は決して外<sup>デモンストラティブ</sup>表的になれない男であつた。(五十)

文(i)において健三を擁護する語りは、文(ii)での批判的な語りによつてうち消され、余韻としての批判意識に包まれている。健三についてだけでなく、御住に向けても用いられている方法である。

そして、(2)の(a)である。

其日彼は家へ帰つても途中で会つた男の事を忘れ得なかつた。

折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に悩まされた。然し細君には何も打ち明けなかつた。(i) 機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。(ii) 細君も黙つてゐる夫に対しては、用事の外決して口を利かない女であつた。(一一)

文(i)と文(ii)とはそれぞれ健三と御住に対しての語りであるが、ここでの語り手は、健三と御住との両人物に対して批判的である。健三と御住の夫婦関係や、健三と岳父との不仲についての言説に見られるが、特に健三夫婦において「斯んな説明が既に細君には空っぽうな理屈であつた。何でも眼に見えるものを、しつかと手に掴まなかつては承知出来ない彼女は、此上夫と議論する事を好まなかつた。又しやうと思つても出来なかつた。」(九十八)というように語られる場合、健三への「空っぽうな理窟」という批判意識は、その後御住への「又しやうと思つても出来なかつた」という批判意識が語られることで希薄化され、批判の対象がすり替えられている。

最後に、(2)の(b)を見てみる。

「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剥けば己だつて大した変りはないんだ」

(i) 平生の彼は教育の力を信じ過ぎてゐた。今の彼は其教育の力で何うする事も出来ない野生的な自分の存在を明らかに認めた。斯く事実の上に於て突然人間を平等に視た彼は、不断から軽蔑してゐた姉に対して多少極りの悪い思をしなければならなかつた。(ii) 然し姉は何にも気が付かなかつた。(六十七)

文(i)において、語り手は自省する健三を示し、彼を擁護する立場にある。しかし文(ii)においては、健三の心境の変化に気付かない御夏を批判的に語っている。結果、それぞれに付された擁護意識あるいは批判意識が相互作用的に高まつてゐるのである。御住に対する擁護意識と健三に対する批判意識とが示される「六十一」以外、語り手は健三を擁護し、対する御住や御夏、比田を批判している。また、その時に見られる人物への批判意識は、文(ii)に見られるような「気が付かなかつた」や、「頓着しなかつた」という言辭で表されている。

このように語り手は、人物に対する擁護意識あるいは批判意識を、単純な形ではなく、擁護意識あるいは批判意識がより強調されるような仕組みに基づいて語っている。そして、健三に関して言うならば、彼が批判的に語られるのは他の人物への擁護意識と同時にではなく、また、彼が擁護的な意識で語られるのは他の人物への批判意識と比較される形をとるのが大半である。

## 三 先導者としての語り手

これまでの考察で、テキストにおける語りは健三以外の人物に対してほとんどの場合において批判的であり、このことが基底としてあるために、彼への批判が軽減されるとともに彼への擁護の意味合いが増幅されている、またそのような仕組みの語りが開示されていることが明らかにされた。このような語りの在り方は藤森清氏が指摘しているように、「その言説が一般にわれわれが三人称の語り手に慣習的に要求するような透明性から微妙に逸脱している」<sup>(3)</sup>のであり、このことをジェンダー批評の視点から見れば、御住の出産をめぐる江種満子氏がいうように「健三の振る舞いを批評し、組み替える視点はこの小説のどこにもない」<sup>(4)</sup>となる。換言すれば、語り手は健三への批判意識に弱いということであり、そこには確かに「健三と語り手の錯綜した関係」<sup>(5)</sup>がうかがえる。「道草」における語り手は決して公平ではなく、秋山公男氏がいうような「絶対的視点」<sup>(6)</sup>の持ち主ではないのである。ところで、テキストには次のような言説がある。

彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうち何方かに中途半端な自分を片付けたくなつた。然し今から金持になるのは迂闊な彼に取つても遅かつた。偉くなろうとすれば又色々な塵勞が邪魔をした。その塵勞の種をよくく調べて見ると、矢つ張り金のないのが大原因になつてゐた。何うして好いか解らない彼はしきりに焦れた。金の力で支配できない真に偉大なものが彼の眼に這入

つて来るにはまだ大分間があつた。

(五十七)

「一体あの人は何うしてその御藤さんて人と——」  
細君は少し躊躇した。健三には意味が解らなかつた。細君は云ひ直した。

「何うしてその御藤さんて人と懇意になつたんでせう」

御藤さんがまだ若い未亡人であつた頃、何かの用で扱所へ出なければならぬ事の起つた時、島田はさういふ場所へ出つけない女一人を、気の毒に思つて、色々親切に世話をして遣つたのが、二人の間に関係の付く始まりだと、健三は小さい時分に誰かから聴いて知つてゐた。然し恋愛という意味を何う島田に應用して好いか、今の彼には解らなかつた。

「慾も手伝つたに違いないね」

細君は何とも云はなかつた。

(六十一)

傍線部から、語り手が、物語の時間から見れば未来に在るといふことが分かる。そしてこれを反転させれば、物語の未来において健三が右の二点を達成していると読むことも可能であろう。

これに関わるのが、相原和邦氏がいう「反措定叙法」<sup>(7)</sup>である。氏は、『何と云つたつて女には技巧があるんだから仕方がない』／彼は深く斯う信じてゐた。恰も自分自身は全ての技巧から解放された自由の人であるかのやうに。(八十三) という部分を例に挙げ、「別の可能性の想定」、直前の文を「抑制し、否定しようとするイロニカルな発想に規定されている」と説いている。藤森氏もこれを受けて、先の二つにおける語り手を、「物語内容からすれば未来の時点の物語内容、物

語の現在においてはまだ実現されず可能態としてだけあるような物語内容を併置することにより、物語の現在に新たな視角を与えようとする『反指定叙法』の語り方である。」と述べている。

しかし、物語の未来に在る語り手は、健三がやがて「金の力で支配できない真に偉大なものが」「眼に這入つて来」て、「恋愛という意味を何う島田に応用して好いか」も理解することを知っている。だとすれば、このような語りは、健三が物語の未来の状態にたどり着くために必要だった認識が、「もしも」だったら」という「If」の形で提示されていると言えるのではないか。その場合、語り手には、「イロニカルな発想」だけではなく、当時の健三を（全肯定ではないにせよ）容認する意識があつたと推測され、これは先の分析に見た健三に対する擁護意識と呼応する。また、「反指定叙法」によって示されるのは、「新たな視覚」ではあつても「まだ実現されず可能態としてだけあるような物語内容」ではない。むしろ、実現されることがなかつた物語内容と言ふべきであらう。

「反指定叙法」から明らかにするのは、「If」を提示しつつ健三を物語の未来へと導く、先導者としての語り手の姿である。そして、その「If」の中に回想し反省する語り手の意識を見るとき、そこには必ずしも相対や客観の眼はなく、金子明雄氏がいうように、仮説としての「潜在的一人称小説」として「道草」を捉えることが、まずはできると思われる。

#### 四 作家と語り手

しかし、ただそれだけかというところ、「道草」の中には御住の内面に関する語りもあり、「潜在的一人称小説」という捉え方は仮説の域を出がたい。金子氏自身もこのことを自覚しており、仮説の下での語り手（「語る健三」と健三（「語られる健三」）との認識の差異を「やがて語る現在の認識に到達する健三がかつて抱えた認識の遅れ」としてはいるが、語り手の意味づけとしては未だ不十分であらう。

私はこれを、語り手の造形に際しての作家の意識の問題として扱つてみたい。この場合、一般的な三人称小説において語り手は公平な存在であるということ前提とした上で、「道草」においては「その言説が一般にわれわれが三人称の語り手に慣習的に要求するような透明性から微妙に逸脱している」と指摘する藤森氏に近い立場に立つ。この藤森氏の見解は、金子氏によって「同時代の小説の語りのモードから、『道草』の語りの規範からの〈逸脱〉が認識されるかどうか検討の余地が残る」とされているが、当時の作家の意識として扱うときには、非常に重要になつてくるのである。

漱石によつて語り手の問題が意識される端緒は、「坊っちゃん」執筆以後、「文学論」（明治四十年五月 大倉書店）の構成段階にうかがえる。「文学論」第四編の「間隔論」では、「作中人物—作家—読者」という図式が想定され、作中人物すなわち登場人物に対しての読者の印象を左右するのが作家であるという認識が示される。そして、「作家篇中の人物と一定の間隔を保つて批判的眼光を以て彼等の行動を叙述して成る」小説を「批評的作物」、両者の間に間隔の認むべきなくして、同情の極油然として一所に渾化せる「小説を「同情的作物」と名付け、登場人物と読者との間に位置する作家の問題を論じている。

だが、この時の漱石は作家の態度を重視しており、また対象として一人称小説を意識していたようである。そのため、彼の中での語り手への意識はまだ未熟である。

その意識が明確になるのは、「夢十夜」(明治四十一年七月〜八月『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』)執筆時であると考えられる。「夢十夜」の語りでは、一人称、三人称、その中間的な語りというように人称が使い分けられている。中間的な語りとは、ある時点の別の人物をも語るという自分について一人称で語りながらも、同じ時点の別の人物をも語るというものであり、「夢」を「夢」らしく語るための方法であると言<sup>12</sup>える。このような方法を採用するに際し、漱石は「夢」を「夢」らしく語り得る語り手を造形しなければならなかったはずであり、その結果が、一人称と三人称との中間的な語り手の創造となつて表れているのである。「間隔論」での図式が(作中人物―語り手―作家―読者)へと深化するのは、まさにこの過程においてである。

そして、漱石は前期後期両三部作を書くことになる。前期三部作では主人公の心理を追うことが中心であり、三四郎や代助、宗助の内面が焦点化されていく。だが、後期三部作へと進むにしたがつて、主人公以外の人物へも視線が向けられていく。須永、一郎、「先生」がその対象であり、それは一人称の語り手によってなされるのである。ここで改めて問題としたいのは、前期三部作は三人称による語り手、また後期三部作では一人称による語り手が採用されているということである。これは、「夢十夜」以前の「坑夫」(明治四十一年一月〜六月『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』)での一人称回想が「坑夫」の作意と自然派伝奇派の交渉(明治四十一年四月『文章世界』)で意図

した、「昔のことを回顧すると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も悪い所も同じやうな眼を以て見て書ける。」といった成果が上げられず、その後「夢十夜」を執筆したことによつて語り手への意識が芽生えたことによるであろう。

このような過程を経て、漱石は「道草」に取りかかったのである。つまり、一人称と三人称、語りの方法として両方をともに試みてきた彼には、「坑夫」や「心」(大正三年四月〜八月『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』)での一人称回想とその失敗とともに、「彼岸過迄」(明治四十五年一月〜四月『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』)における「世間」を聞く(結末)、あるいは自著による「心」(大正三年九月二十六日付『時事新報』など)での「人間の心を捕へたる此作物」という意識があつた。そこで、これまでの創作活動を振り返り、三人称で、さらに人間を追求するための小説を志したのだと考えられるのである。

このように考えたとき、「道草」における語りの必然が把握できよう。すなわち、一人称から出発した漱石が、人間をより広く、またより深くとらえるために、三人称による語り手を創造した。しかし、以前の一人称による語りの要素も混在してしまい、結果健三という人物を中心に据えながら他の人物も語ろうとする、一見三人称の、しかし金子氏がいうように一人称の性質も兼ね備えた語り手が誕生してきたということである。健三を中心に据えて先導しつつ、他の人物への眼差しをも持ち、未来から現在を語り得る「道草」の語り手は、漱石のこれまでの文学的変遷の結果生じた語り手であつたのである。



おわりに、あるいは同時代の語り研究に向けて

複数の人物を語る場合、それは往々にして、三人称の語り手によって人物の關係を通して行われる。そのため、先行研究において、「道草」では自己と他者の關係性が問われているといった評価が多くなされたのだが、分析の結果、語り手の健三擁護の姿勢や、先導者としての性格がうかがえた。その意味で、人称が不安定なものとなっていることは否めず、先行研究での評価は完全には的を得ていないことになる。

だが、すでに述べたように、漱石文学全体を概観したとき、語りが一人称から三人称へと移行しており、またその文学内実も、主人公の自己認識の深化というレベルから、人間の複合的、総合的な把握へと移行している。このことを踏まえたとき、「道草」の語り手が必ずしも相対や客観の眼を持つ存在ではなかったとしても、人間に対して、回想による時間的把握と物語の現在における空間的把握とを同時に行おうとした漱石の試みとして、「道草」、あるいは「道草」における語り、評価できるのではないだろうか。

ところで、日比嘉高氏は、作者が自分自身を小説に描くという（自己表象テキスト）が日露戦後に頻出していく背景として、(1)噂話・楽屋話などのメタ情報の掲載が恒常化するメディア状況、(2)メタ情報と作品とを交差させて読む読書慣習、(3)小説ジャンルの境界意識の変化——（自分を描く）ことの認可、(4)同時代の（自己）論の水準、枠組みの分析、(5)隣接ジャンル・青年層の動向、という5点を挙げ、(1)と(2)の背後に「作家の身辺が題材になるという自然主義文学の台頭」が

あること、また(3)に関連して、田山花袋「蒲団」（明治四十年九月『新小説』）の発表後、「作家が自分自身のことを作品に描いてもよいのだというように、小説ジャンルの境界意識に変化が起こってくる」ことを指摘する<sup>(15)</sup>。事実、同時代では塩原昌之助が島田のモデルとして扱われており、「道草」に対する漱石唯一の自叙伝という現代の通説的認識が当時すでに存在したことがうかがえる。「道草」と自然主義文学との関連を説かれる所以は、このあたりにあると思われる。

だが、「道草」執筆時の大正四年時点において、漱石が敢えて自然主義に歩み寄ったとは考えにくい。そのような認識が生じたのは、作家の留学体験や養子問題といったメタ情報を（我々を含んだ）読者が手にし、テキストと結びつけて読んだためであろう。加えて、（作中人物—語り手—作家—読者）というように、漱石がその造形のプロセスにおいて、作家にきわめて近い存在として語り手を考えていたことも関連していると思われる。この問題については、漱石に作家の道を歩ませる契機を作った正岡子規の「写生文」理念が確立されていく様相を、同時代の文壇、とくに自然主義文学と対照させながら考察していく必要があるのだが、今は別稿に譲りたい。

注(1) 研究史を概観しても、作品論、語り論、ジェンダー的考察を問わず、多くの論考が語りの問題に触れている。

(2) 近年出版された、平岡敏夫・山形和美・影山恒男編『夏目漱石事典』（平成十二年七月 勉誠出版）における松下浩幸氏の「道草」解説でも、「主人公と作者、及び他の人物たちとの距離を客観化するための複眼的な語り手を巧妙に配置した、三人称回想文体による特異な小説」と、語りの問題に触れてはいるが、やや曖昧の感がある。

- (3) 石原千秋「叙法形態から見た『道草』の他者認識」(昭和五十五年十月 『成城国文』第四号)
- (4) 藤森清「語り手の恋——『道草』試論——」(平成五年十二月 『日本の文学』第2集 有精堂)
- (5) 江種満子「『道草』の妊娠・出産をめぐる」(平成六年十一月 『漱石研究』第3号 翰林書房)
- (6) 前掲注3参照。
- (7) 秋山公男「『道草』——構想と方法」(昭和五十七年四月 『文学』『漱石文学論考』——後期作品の方法と構造——)(昭和六十二年十一月 桜楓社) 所収)
- (8) 相原和邦「漱石文学における表現方法——『道草』の相对把握について——」(昭和四十一年十一月 『国文学攷』、『漱石文学』——その表現と思想——)(昭和五十五年七月 塙書房) 所収) 及び岩波文庫版『解説』(平成三年四月 岩波書店)
- (9) 前掲注4参照。
- (10) 金子明雄「三人称回想小説としての『道草』」(平成七年五月二十日 『漱石研究』第4号 翰林書房)
- (11) 拙稿「『坊っちゃん』論——写生文、あるいは一人称回想への眼差し——」(平成十二年六月 『国文学攷』第一六七号) 参照。
- (12) 拙稿「『夢十夜』論——底流としての写生文——」(平成十二年十二月 『近代文学試論』第三十八号) 参照。
- (13) 拙稿「『回想』と『写生文』——後期漱石文学試論——」(平成十年十二月 『近代文学試論』第三十六号) 参照。
- (14) 同右。
- (15) 日比嘉高「『自己表象』の文学史 自分を書く小説の登場」(平成十四年五月 翰林書房)
- (16) 関壮一郎「『道草』のモデルと語る記」(大正六年二月 『新日本』)。  
 漱石の死後に発表されたこれは、「篇中の主要なモデルとして取扱はれた先生の養父母」(十一)、「親のことを、少しの恐れもなく、赤裸々に表現するといふことは、(中略)遠慮と謹慎とがあつて然るべき」(同)という言説からもうかがえるように、漱石追悼というよりはモデル小説や作家への批判という意味合いが強い。当時「道草」が自伝

的小説として読まれたことの証左になるう。

(17) 初期漱石の作として「倫敦消息」(明治三十四年五月『ホトトギス』)や「自転車日記」(明治三十六年六月『ホトトギス』)が挙げられるが、ともに、ロンドンから子規宛に書いたものである。

〔付記〕

テクスト及び漱石の評論、関壮一郎「『道草』のモデルと語る記」は、全て『漱石全集』(平成五年十二月〜十一年三月 岩波書店)に拠る。  
 (やました こうせい、ラ・サール中学校・高等学校教諭)